

入選

テーマ…医療と福祉、わたしの体験 「駐車場から始まる心のバリアフリー」

沖縄県立宮古総合実業高等学校2年 平良 珠夏

将来、医療関係の仕事に就くことが私の目標です。私がそう思うようになったきっかけは、妹の存在があったからです。

私が幼稚園生の時、未熟児、さらに脳性まひという重度の障害を持って妹は産まれてきました。妹は日常生活でも介護が必要です。一人での食事は難しいため、母や私が介添えをします。またお風呂の場合は、ヘルパーさんが自宅まで来てサポートしてくれます。慣れもあるのかもしれませんが、家での生活に不便さを感じることはほとんどありません。

しかし、外出した時、それは一変します。例えば車イス専用の駐車場を利用しようとした時、健常者の方の車が止まっていることも珍しくはありません。止められたとしても、スロープタイプの車はタイヤ止めに当たってしまうため、バックでの駐車ができません。駐車後も他の車や行き交う人々の多い中、注意をしながら乗り降りしなければならず、時間がかかります。特に私が住んでいる宮古島は未整備の道も多く、家族で行けないお店も少なくはありません。つまり目的のお店や建物に入る前からあきらめることもあるのです。

しかし「道路や駐車場の整備が第一か」というと、そうではありません。バリアフリーが進んでも、障がい者に対する周りの人たちの内面的な優しさや理解が不足している限り、どれだけ設備が整ったとしても、利用客の不便さや悲しさは無くなるらないのです。

残念ながら、障がい者専用駐車スペースに健常者の車が止まっていたり、その存在に不満の声を持ったりする人がいるのは事実です。なぜお店の出入り口の最も近い場所に障がい者専用の駐車スペースがあるのか、広めに作られているのはどうしてなのか、少し考えてみれば誰でも分かるはずですよ。

駐車スペースが近くにあるのは、短い距離の移動でも困難を要する人がいるから。また、広く作られているのは車イスの乗り降りや介添えにはある程度のスペースが必要で、他の車を傷つけないためでもあるから。このことを皆が知識として持っていれば、勝手に止めたり、広めのスペースに腹が立ったりすることもなくなるでしょう。これこそ理解から始まる「心のバリアフリー」なのです。

私たちは誰でも歳をとります。そうなる若いうころのようにはいきません。けがをしたり足腰が弱くなってしまうと、車イスや誰かの介添えが必要になるかもしれません。障がい者にとって住みやすい町は、高齢者にとっても住みやすい町です。つまり未来の私たちにとつての「住みやすさ」につながるのです。これを自分の将来のこととして考えることができれば、心のバリアフリーも自然と進んでいくのではないのでしょうか。

私は妹の笑顔が大好きです。言葉での会話はできません。しかし、毎日話しかけているといういろいろな表情を見せてくれます。私はその笑顔に日々元気をもらっています。それなのに妹に対して偏見の目を持つ人がいます。妹の笑顔に幸せをもらっている家族がいること。そのことを考えようとせず偏った視線を向ける。漠然と強い悲しみを感ずます。

社会にはさまざまな偏見から不満を感じる人がいます。もちろん、さまざまな角度からの視点を持つことは大切です。しかし少し立ち止まって考えれば理解できることや納得できることもあります。その場だけの判断や自分だけの認識で結論を出さずに、一歩歩み寄って理解しようとする努力も必要なのです。そしてその一歩は、障がいを持つ本人だけでなく家族やその人を大切に思っている人の幸せにもつながるということを、もつともつと知って欲しいです。

「心のバリアフリー」で幸せは広がります。私に目標を与えてくれた妹。そんな妹から、私や家族はこれからも多くの幸せをもらうことができます。

明日、誰かの「幸せ」が駐車場の片隅から始まりましょよ。